

1 年生を対象とした自主参加型合宿『森の学校 2012』の実施概要 および参加学生の意識調査に関する報告

¹ 下岡ゆき子 ¹ 篠原正典 ¹ 岩瀬剛二
¹ 橋本慎治 ¹ 渡邊浩一郎

¹ 帝京科学大学生命環境学部自然環境学科

Report on the extracurricular practical trainings for the first-grade students in 2012
and the results of questionnaires on the participants.

¹ Yukiko SHIMOOKA ¹ Masanori SHINOHARA ¹ Koji IWASE
¹ Shinji HASHIMOTO ¹ Koichiro WATANABE

Key word : 野外実習、合宿、新入生の導入

1. はじめに

自然環境学科の特色として、1～2年生は千住・上野原両キャンパスに学生が所属しているが、3年次になると全員が上野原キャンパス所属になるという点がある。千住キャンパス開校初年度には、千住から上野原という新しい環境へ移動することが障壁となり、退学してしまう学生もみられた。この事態を受け、1～2年生の間に両キャンパスの学生の橋渡しとなるようなイベントを行い、横のつながりを作ることで3年次の上野原への転キャンパスをスムーズにする必要があると考えられた。また、自然環境学科には、自然への漠然とした憧れや知識はあるものの、自然と直接向き合ったことのない学生が多い。このことが講義内容を実生活とは乖離したものと捉えがちにし、学習意欲の低下をもたらすと考えられた。そこで2009～2010年度に教育推進研究費を利用して、様々な専門家を招き、楽しみながら自然を学ぶプログラムを土曜日に数回ずつ実施した。当初は好評だったが、2010年度からは土曜日開講科目が増加したため、参加者が著しく減少した。

これを受け2011年度には上野原・千住両キャンパスの1年生を対象に、山梨県南巨摩郡で合宿形式の実習“森の学校 2011”を実施した。夜間に飛来するコウモリの観察、地元の猟師さんの話を伺う機会など通常の大学の实習では不可能なプログラムを盛り込んだところ、1年生104名中43名の参加が得られ、実習後のアンケートでは、全員が「普段の講義や実習では学べない内容だった」、「楽しかった」、「後輩にぜひ勧めたい」と回答した。また、両キャンパス

の学生間の交流を促す効果が絶大で、実習終了後も学生同士でメールをやり取りするなどの効果が見られた。当学科では、2011年度に初めて千住キャンパスから3年生を迎えたが、残念ながら少なからぬ退学者もおり、転属先に友人がいないことは学生に不安をもたらしていることが伺えた。3年時の所属キャンパス移動を“不安なもの”から“楽しみなもの”に変え、退学者を減らす上でも、こうした交流の機会は重要であると考えられた。

幸い、2012年度にも同研究費を獲得することができたため、特に効果が高いと考えられた合宿に内容を絞り、『森の学校 2012』を実施した。さらに「森の学校 2011」の参加者からTAを募って『森の学校実行委員会』を発足し、TA学生にもプログラム作り、事前準備等の運営から主体的に関わってもらうことで、実習の内容をより充実させるとともに、学科内の縦の繋がりの強化を狙った。本稿ではその実施概要および、合宿終了後に行ったアンケート結果を報告する。

2. 目標と全体概要

『森の学校 2012』は山梨県南球磨郡早川町南アルプス邑野鳥公園において、夏休み中の9月11日(火)～13日(木)に二泊三日で行った。早川町は、町全体がフィールドミュージアムとして構想され、土地の歴史・風土・文化そのものを博物館として展示し、様々な観察会が行われている。南アルプス邑野鳥公園は、生態計画研究所が運営を担っており、所長の西信正氏は宮城県金華山島で野生ニホンジカの長期的な研究をされてきたなど、スタッフもアカ

デミックな経験が豊富であり、合宿に適した場所である。上野原と八王子の二カ所から大型バス各1台で現地まで往復し、現地では芝生の広場に12基のテントを設営してテント生活を行った。

『森の学校 2012』では、以下の6点を到達目標とした。① 学生の好奇心・学習意欲を喚起する。② 外部指導者による実習を行い、自然に関する幅広い話題を提供する。③ 普段から身近な自然に目を向ける習慣をつける。④ 野外で協同作業に取り組むことにより、豊かな社会性の育成を図る。⑤ 学生同士が打ち解けて会話する機会を設け、コミュニケーション力の上達を図る。⑥ 上野原と千住の2キャンパスにまたがる学生間の交流を促し、3年時の上野原での合流をスムーズなものとする。このうち、①～③については実習プログラムの内容によって、③～⑤についてはテント生活や自炊などの生活面によって、⑤～⑥については班分けや実習プ

ログラムの内容によって到達を目指した。

プログラムの内容は、表1の通りである。②の外部指導者による実習として、前回は現地の生態計画研究所のスタッフの方々にプロジェクトワイルド(自然の仕組みについて遊びを通して理解するプログラムや、初対面の人と親しくなるためのプログラムなど)、夜間の哺乳類の観察、耕作放棄地の森林への遷移の様子を観察などを行っていただいたが、今回はこれらに加え、現地のおばあちゃんたちと一緒にソバの実を播く畑仕事を行った。さらに、自然環境学科の1年生向けの講義『昆虫学』を担当されている非常勤講師の田付貞治先生にも講師として参加して頂き、夜間には鳴く虫の昆虫採集、昼間にはその他様々な昆虫の採集を行った。これらが今回の大きな改良点である。

参加者は11組の活動班と12組のテント班に分けた。様々なプログラムに取り組む活動班は男女混合とし、各班に両キャンパス所属の学生が必ず入るように

表 1. 『森の学校 2012』のプログラム：プログラム中のプロジェクトワイルドとは、米国で開発された「自然や環境のために行動できる人」の育成を目指した野生生物を題材とした環境教育プログラムのことである。

日	内 容
11	13:30 野鳥公園着 荷物運び、テント設営 14:30 アイスブレイカー 15:30 園内散策とフィールドサイン 16:30 夕食準備(陸班)、入浴(海班) 18:00 夕食(カレーとシチュー)+塩山市・反田農園の果物 19:00 野山の昆虫の観察(鳴く虫編) 20:30 片付け(海班)、入浴(陸班) 22:00 消灯
12	06:00 起床 06:30 朝食・自由時間 08:00 プロジェクトワイルド 09:00 野山の昆虫の観察(日中編)/キノコの採集と観察 12:00 昼食 13:00 大塩の滝訪問と水生昆虫/池でのプランクトンの観察 16:00 赤外線センサーカメラの設置 16:30 夕食準備(海班)、入浴(陸班) 18:00 夕食(シカ肉ほかのBBQ) 19:30 大西さん、猟師さんによるシカの話 20:30 池でのコウモリ探索+橋の上からシカの探索(希望者のみ) 21:00 片付け(陸班)入浴(海班) 22:00 消灯
13	06:00 起床 06:30 朝食・自由時間 08:00 赤外線センサーカメラのデータ確認 09:30 農作業体験 11:30 昼食、片付け 13:00 野鳥公園発・バス内でアンケート調査の実施と回収 16:30 解散



図1 野鳥公園の芝生広場にて、設営したテントの前に集合して現地スタッフから説明を聞く学生たち

した。テント班は男女ごとに分け、各テントに両キャンパス所属の学生が入るようにした。また、テント班の名前をトド、イルカ、サル、アナグマなど動物の名前にし、陸の動物の名称のついた陸班、海の動物の名称のついた海班に大きく二つに分け、陸班と海班で日ごとに夕食準備や片づけを分担することとした。

引率は著者らを中心とした6名の本学科教員とTA7名が行い、現地でも4名の外部講師の協力を仰いだ。また、参加学生には事後のレポート提出は課さないこと、単位修得とは無関係な実習であること、さらに、実習後に無記名のアンケートを依頼することを事前に知らせた。2011年度のアンケートは約半年後の後期授業終了後におこなったが、2012年度は個々の実習内容の見直しを図るため、合宿終了直後の帰りのバス車中において、より詳細なアンケートをおこなった。



図2 班ごとに昆虫採集を行い、採集した昆虫を持ち寄って、田付先生に同定してもらう学生たち。昆虫採集では学生の真剣さが際立っていた。



図3 大塩の滝の滝壺に飛び込む学生たち。自由時間としているが、一通り遊んだ後、指示しなくても自ずと水生昆虫を探し始める姿が印象的だった。プランナリアが多く、あちこちから驚きの声が上がった。

表2 森の学校 2012 への参加者内訳

	男子	女子	合計
1年生 千住	34	3	37
上野原	11	6	17
TA 2年生	3 (千住2、上野原1)	3 (千住1、上野原2)	6
4年生		1 (上野原1)	1
教員	5	1	6
外部講師	3	1	5
合計	56	15	71

3. アンケート調査とその結果、目標の達成度

実習終了後のアンケートは、11個の質問と感想や意見の自由記入欄から成るものとした。Q1～Q11には、「はい」、「いいえ」、「どちらでもない」の3択で回答を得た。Q11は実施したプログラムの中から特に興味深かったプログラムを複数回答可として回答を得た。アンケートの内容は以下の通りである。

- Q1：楽しめましたか？
- Q2：学生生活の充実につながりましたか？
- Q3：学校では学べない内容でしたか？
- Q4：今後の単位取得につながるとおもいますか？
(興味や動機付けなどを含める)
- Q5：自然について、興味は高まりましたか？
- Q6：食事には満足しましたか？
- Q7：友達は増えましたか？
- Q8：他キャンパスの友達はできましたか？
- Q9：来年度も開催される場合、後輩に参加を勧めますか？
- Q10：2泊3日という長さは適切でしたか
(適切・長い・短い)
- Q11：特に興味深いプログラムはどれでしたか
(複数回答可)

図4から、Q1「楽しめたか」、Q3「学校では学べない内容だったか」、Q5「自然への関心が高まったか」についてそれぞれ“はい”の回答率が際立って

高いこと、また、友達作りについても、Q7、Q8で9割以上が“はい”と回答していることから、当初の目的に対してかなり達成できたと言えるだろう。一方で食事に対する不満が目立った。後に個別に話を聞いたところ、日常的に食べているものがない、自分で料理しなくてはならないのが面倒、朝食のパンをトーストできず冷たかった、朝食時に大人数分のお湯を沸かすのに時間がかかってコーヒーや紅茶をすぐに飲めなかった、徒歩10分程度の距離にある自販機まで行ったのに売り切れていて買えなかった、など自然の中で生活する上では回避できない不便さが挙げられた。また、買い出しの際にTAに学生が朝ご飯によく食べるものとしてマグカップサイズのインスタントラーメンを挙げたので、試しに追加したところ、参加学生が声をあげて喜び、瞬間に売り切れたことを考えると、教員と学生との食生活の違いも不満を産み出した1つの原因と考えられる。不便さを経験することも合宿の重要な側面であるが、対応可能な部分は今後改善し、学生が生活面での不自由さを感じずにプログラムに専念できるようにすることも必要だろう。

個々のプログラムについて見ると、大塩の滝訪問、昆虫採集、キノコ採集への評価が高い。どれにも共通するのが、1) 自由時間の中で班ごとに森や川に散らばり、それぞれ自分たちで探すようなプログラムであること、2) こどもの頃に経験した身近な素材について、専門家による詳しい解説を加えて改めてやり直

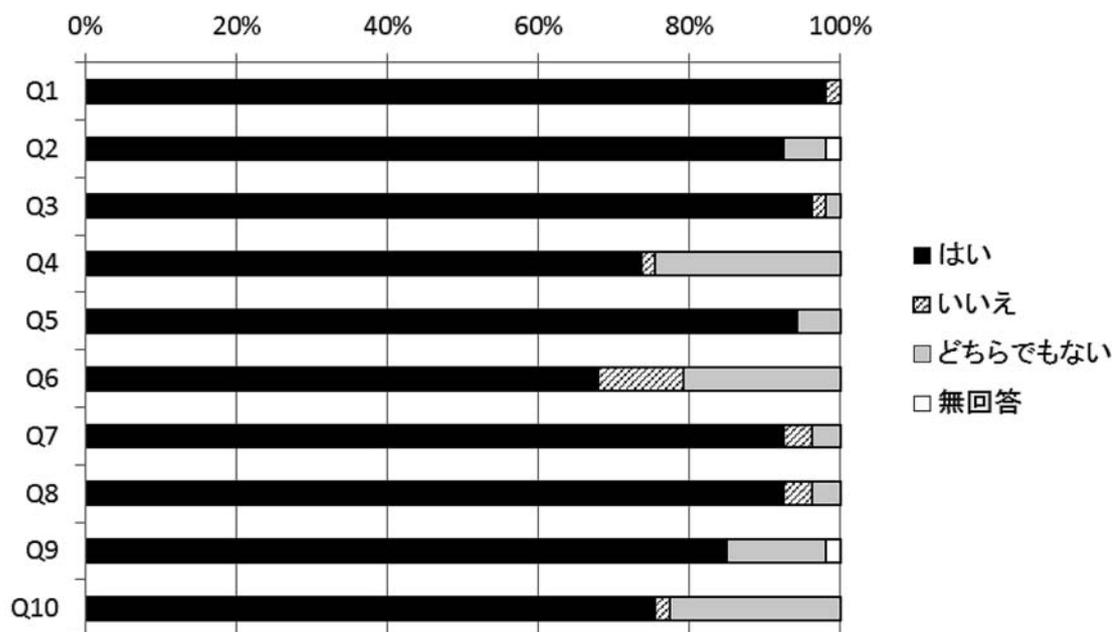


図4 アンケート Q1～Q10 への回答結果。

ただし、Q10に関しては“適切”を“はい”、“長い”を“いいえ”、“短い”を“どちらでもない”と表示した。

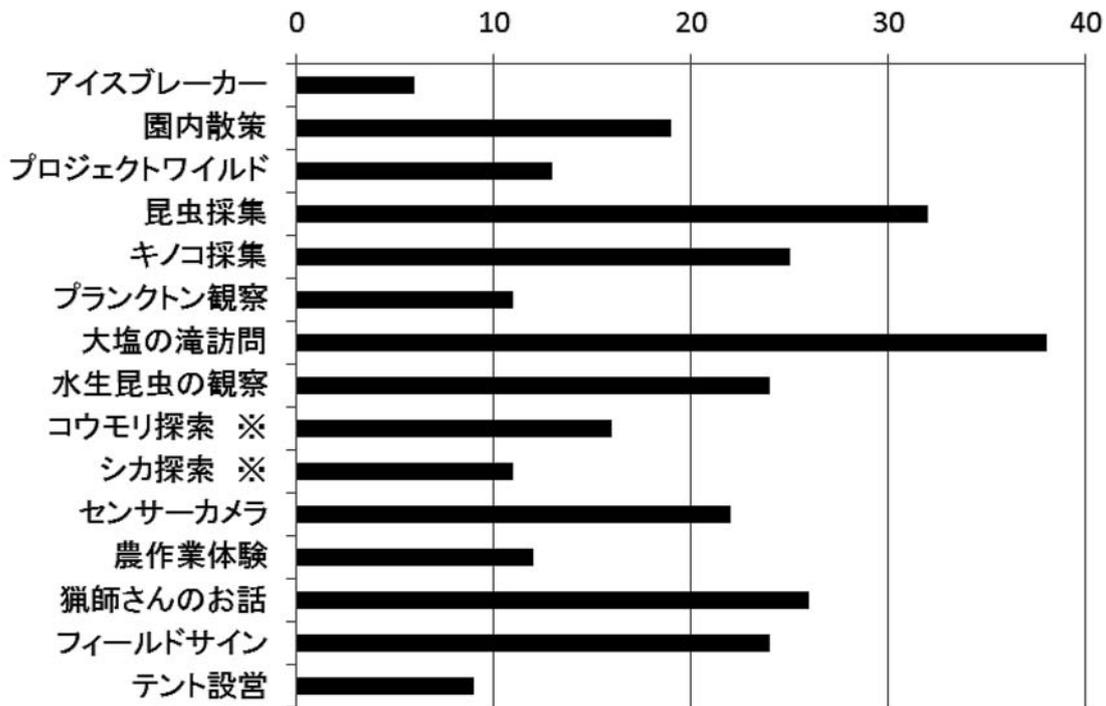


図5 アンケート Q11 への回答結果 (複数回答可としている)。

シカ探索とコウモリ探索は希望者のみの参加とした。※は希望者のみ参加のプログラムである。

す内容であること、である。学生は想定外の内容であると刺激が強すぎるのか、ついていけないと感じてしまいがちなようである。本来はそれによって開眼してほしい所であるが、学生の傾向を踏まえ、落ち着いて楽しめる、親しみやすいプログラムから始め、3日間の中で徐々に慣れていくようなプログラム作りが今後求められるのではないだろうか。

また、猟師さんのお話を伺うプログラムも比較的评价が高かった。猟師さんからシカ肉を提供して頂くと同時に、そのシカを撃った時の話や日常的な猟の話をして頂いたのだが、学生からの質問が途絶えることがなく、その後のバーベキューの間も常に数名の学生が猟師さんを取り囲んで質問を続けていた。普段の講義では見られない、学生の強い好奇心と積極的な態度を見ることが出来る機会であり、実に印象的であった。こうした機会が学ぶことへの関心の入り口となることを期待している。

4. 森の学校運営委員会

森の学校 2012 では、前年度の TEIKA 自然合宿への参加者から希望者を募り、2年生6名(上野原男子1名、女子2名、千住男子2名、女子1名)、4年生学生1名をTAとして採用した。彼らには当日のTAとして教員の実習の補佐と安全の確保、学生の生活面での補助を担当するだけでなく、森の

学校運営委員会として前期中ごろから主体的に活動してもらった。合宿のプログラム作りや食事のメニュー選定に自主的に関わってもらい、特に前日の68名分の3日間の食料の買い出しや荷物準備では、一日かけてフルに活動してもらった。森の学校運営委員会を発足して良かったと考えられる点は以下の通りである。

① 学生にしか分からない問題点

2011年度に1年生として参加していた2年生からは、テントの中の様子や、学生同士のちょっとしたトラブルなど、教員の目には明らかでない様々な問題点を指摘してもらうことができた。これにより、合宿中に起こりうる問題点を予測し、未然に防ぐための様々なアイデアを出してもらうことができた。

② プログラムの充実化

2011年度参加者は、自分たちが楽しんだ合宿だったので、後輩たちにも自分たち以上に楽しんでもらいたいという気持ちが強かった。そのため、実習内容に関する率直な意見をもらうことができ、どうすれば自然に不慣れな学生にも無理がなく、かつ充実した、ここでしかできない実習内容にすることができるか、特に休憩時間の取り方やプログラムの配置順などについて積極的な意見をもらうことができた。

③ 縦のつながりの形成

合宿中に TA が 1 年生に積極的に話しかけ、1 年生も相談などを持ちかける姿が印象的だった。自然環境学科では、一部の熱心にサークル活動をしている学生を除いて、縦のつながりが非常に弱いという問題点が見られていた。合宿中の和やかな雰囲気の中で先輩と親しく話したことによって、その後それぞれのキャンパスに戻ってからも親しい関係が続いている例があるようだ。特に女子 TA からは、廊下で 1 年生と会った時に、同級生には相談しにくいような学生生活でのトラブルについて相談を受けた、などの報告を受けている。こうした縦の繋がりが形成されたことで、学生生活がより充実したものになることが望まれる。

2012 年度参加者に、来年度、TA としての参加を希望するかをアンケートの自由記入欄に書いてもらったところ、54 名中 13 名が希望した。先輩が TA として参加する姿を見て憧れたり、楽しそうだ、あるいは有意義だと感じる機会を提供できたことは意義深かったのではないだろうか。

森の学校 2012 の様子は、開催以降、オープンキャンパスでスライドショーやパネル展示を行い、参加学生や TA 学生による解説をおこなっている。高校生や父兄にも評判がよく、こんな実習があったら大学生活が楽しめそうだ、との意見を聞くことが多い。助言教育の一環としてのアピール力も見込むことができそう。

5. まとめと今後の課題

直接の情報収集やアンケートなどから、学習意欲の向上やキャンパス間の交流などを意識した目標は全て達せられたと考える。本合宿の参加者 54 名は実習後 1 年以上が経った今も意欲的に就学を続けている (2014 年 1 月現在)。

今後の課題としては、自由参加の実習であるため参加が学生の主体性に任せられ、積極性に乏しい学生を参加させることが困難であること、調査結果を比較検討する対象データの取得が困難なことなどが挙げられた。また、実習の 1 年半後に北千住キャンパス所属学生が上野原キャンパスへ移動する。その際に合宿で友達ができたり、上野原キャンパスの様子をあらかじめ聞いていたことがどのように効果を持つのか、今後追跡調査をおこなうことが重要であると考えられる。2013 年度も再度合宿形式の実習を試み、現在、その成果や反省点を検討中である。今後も、学生たちの実状や希望に配慮しながら、一層、大学教育の促進につながる事業を企画・提供していきたい。

6. 謝辞

本自然学校を開催するにあたり、ご多忙な中ご指導をいただいた講師の方々、準備や講師補佐にあたってくれた学生諸氏に深謝する。森の学校 2012 は平成 24 年度の教育推進特別研究費の助成を得て実施した。

7. 引用文献

- 1) 篠原正典、下岡ゆき子、岩瀬剛二、渡邊浩一郎、橋本慎治：自主参加型実習「うえのはら自然合宿」および「TEIKA 自然学校」の実施概要および参加学生の意識調査に関する報告．帝京科学大学紀要 8, 189-191, 2012.
- 2) 篠原正典、下岡ゆき子、岩瀬剛二、渡邊浩一郎、橋本慎治：自主参加型実習「うえのはら自然合宿」および「TEIKA 自然学校」の実施概要および参加学生の意識調査に関する報告．帝京科学大学紀要 9, 177-180, 2013.